

日本人学生の英語力—TOEFLによる国際比較

English Proficiency of Japanese Students
— Comparative Study Based On TOEFL —

萬 戸 克 憲
Katsunori MANTO

This paper discusses the English proficiency of Japanese students on the basis of 1991~1993 TOEFL Tests. The concept of the TOEFL Test, its validity as a proficiency test, and the comparative position of Japanese students are examined. The poor performance of Japanese students is often attributed to the lack of the linguistic affinity to English, but this is partly negated by the studies of the performance of students from European and other Asian countries, leading to the conclusion that there are some serious deficiencies in ELT itself in Japan.

キーワード：学生の英語力，国際比較，TOEFL，英語教育

英語の共通語化

これまでも、英語が世界の共通語としての優位性をもっていることについてはさまざまに論議されてきた（鈴木1987，萬戸1988，本名1990など）。ところが，1995年の現在，経済活動や人々の交流が一段と激しくなるに従って，英語の共通語としての勢いはさらに加速し名実共に切実な問題となってきた。

『日経ビジネス』（1995,5-1・8）は，「問題は日本語—ネットワーク時代の競争力」として，特集を組んだ。日本の企業にとって日本語が世界的なネットワークに入るのに大きなハンディになっているというのである。いわく，「世界を縦横にはしるコンピューターネットワークのインターネット。そこでの事実上の公用語は英語」である。さらには，「自国言語の保護にかけては世界随一といわれるフランス。そこで今人気を集めるビジネススクール（INSEAD）のMBAのコースでは講義の95%が英語」であり，「英語を基盤とした経営は，米国企業だけの話ではない。例えば，スイスとスウェーデンの企業が合併した重工業メーカー，ABBアセア・ブラウン・ボベリ。同社は『共通言語は英語，共通通貨は米ドル』と明確に規定している」と，英語の共通語化を強調している。

この雑誌の記事はビジネスの分野からの発言であるが，英語が世界の共通語であるという方向は我々の生活のどの面においてももう疑う余地はない。したがって，英語を母語としない国は，第2言語として英語を習得することなくしては，これからのボーダーレス時代には生きていけない状況にきている。このことは，日本にとっては現在盛んに言われて

いる円高による経済の空洞化よりも、もっと厳しいものになるかもしれないのである。

我々は中学校、高等学校のそれぞれ3年、そして大学の基礎教育期間の2年、合計では8年間の英語教育を行っている。学校における語学教育だけではなく、生徒一人ひとりが予習や復習に費やす時間、さらには、個人で塾や予備校に費やす時間と費用は莫大なものになる。その学生達が、はたしてどれぐらいの英語力をつけているについて、これまで国際的に比較することはあまり考えられたことはなかった。そこで、この小論ではそのあたりについて若干の考察を行いたい。

TOEFLにおける得点

Sect.1 (聴解)	Sect.2 (文法)	Sect.3 (語彙・読解)	Total (全体)
49	50	48	490

TOEFLの1991～93年の日本人受験者のデータでは、リスニングでは49、文法では50、語彙とリーディングでは48、そして、総計は490となっている。「文法」の部門での得点は50で全世界の受験者の中央値であるが、そのほかの部門では中央値以下である。偏差値の場合は、1ポイント、2ポイントの差が大きな意味を持つことを考えると、リスニングでの49（前回の統計では48だったので、1ポイント上昇している）、リーディングの48は全体的に見るとかなり劣った成績である。さらに、総計の490は中央値が500であることを考えると、全世界の受験者の水準を相当に下回っていることになる。

TOEFLは、Test for English as a Foreign Languageのそれぞれの頭文字をとった略語であって、「外国語としての英語の試験」、つまり英語を母語としていない人々を対象に行う英語の能力試験である。英語のネイティブ・スピーカーの中でどれぐらい意思の疎通ができるかをみようとするテストであり、アメリカやカナダの大学を中心に英語を教育言語としているヨーロッパやアジアの高等教育機関では、このテストを受けることを願書提出の際の1つの条件にしている。この成績が授業についていけるかどうかの判定の1つの資料なのである。先程のフランスのビジネス・スクールもTOEFL600以上が入学の最低条件になっている。

実は、TOEFLが外国主催の試験であるために、かえって日本の英語教育界ではあまり高く評価されていないということもある。この試験は、「アメリカの大学を受けるための試験だろう」「日本の大学に行かない、つまり、mainstreamでない人達が受ける試験だろう」ぐらいにしか考えられていないのである。しかしながら、このテストは規模が世界的であるだけに、我が国の英語教育について、私たちが見逃すことのできない貴重な情報を提供していると考えられるべきなのである。

TOEFLとは

もう少し詳しくこのテストを検討してみよう。協会の資料によると、この試験はEducational Testing Serviceというアメリカの非営利団体が、ほぼ30年前の1963—4年度

から始めたもので、現在では、年間に12回（日本では6回）行われ、世界の170か国に及ぶ国で受験することができるということである。その上、受験者の数も年々増加し、1991-92度の受験生の数は80万人を越えている。

テストは上述のように3つの部門に分かれている。冒頭の表ではスペースの関係でこれまで日本で使われている用語を充てたが、英文では次のようになっている。Section 1はListening Comprehension, Section 2はStructure and Written Expression, Section 3はVocabulary and Reading Comprehensionである。得点は日本の入学試験などで行われている100点満点ではなくて模擬試験などでおなじみの偏差値である。ときどき100点満点であるかのような解説を見ることがあるが、それは間違いである。各部門毎に20~68ぐらいのレンジであらわされている。したがって、いくら優秀でも70をこえたりすることはない。また、総計は、各部門の得点の合計を10倍して3で割ったものなので、200~677の範囲で表されることになる。これも700点を越えるような得点はとれない。このテストの結果は、受験者本人に通知されると同時に志望の大学や教育機関に送られることになっているので、受験者にとっても大学にとっても便利なシステムである。

得点の表すもの

さて、このテストの合計点から判断できる英語力の大体の目安について、ETSのガイドラインでは次のようになっている。

- 600以上 英語では十分に proficient と考えられる。
- 550~599 たいていの大学ではあまり制限をしないで学部授業に受け入れるであろう。また、外国人の医者や獣医が業務を行うのに一応の英語力ともみなされる。
- 500~549 理科系の学部など高度の語学力を要しない学部では受け入れられる。看護婦では英語での業務ができる力ともみなされる。
- 450~499 学部を受け入れるとしても補充授業が必要である。
- 400~449 大学の授業を受けるだけの語学力は持っていない。

一般的には、600以上は大学院レベル、550~599は4年制大学、500~549は短大あるいはcommunity collegeの入学資格といわれている。もちろん大学の難易度にもよるので、620点をとっていても学部の入学でさえ難しいと入学担当者が明言している大学もある。

このテストの妥当性については、content validity, criterion-related validity, construct validityの3つの面から検討されているが、そのいずれにも十分な成果があがっている(ETS 1992:33~36)。そして、何よりも、受験者が世界で80万人を越えるという人数の多さがある。また、ETSの調査によると、利用している高等教育機関の98%がacademic workを行うのに十分な英語力を持っているかどうかの判定資料として用いているということである。このテストの英語の能力試験としての権威を物語るものであろう。

国際的な位置

個々の受験者にとっては、それぞれの受験者がどのような成績かということももちろん重要であるが、我々にとっては国籍別や母語別に平均点がどうなっているかは関心の深いことである。協会が「この資料で国別の比較をしたり教育の成否を論ずることがないようにしてほしい」と注意書きをしているのは事実であるが、一方で、そう言いながらこのような統計を発表しているのだから、我が国の英語教育についてなんらかの示唆をくみとることができそうである。

さて、先程見た日本人学生の英語力は国際的にみるとどのあたりに位置するのであろうか。ただここで注意しておきたいのは、日本人学生といっても、日本人全体の力ではなくて、アメリカやカナダで大学に行くことを目指している学生たちの、つまり、ある意味では英語の学習に相当意欲的な学生たちの結果であり、また、ほかの国々でもおなじようにアメリカやカナダの大学を目指している人達の結果である。

上述の指針からみると日本人の490という合計点は、大学に入学を認められるとしても、学部の普通の授業にはついていけないので、英語について補充授業を受けながら、学部の授業のうちで数学など英語の力がそれほど必要でない授業を選んで受けるレベルということになる。これは、我が国が先進諸国の一員であることを考えると、決して誇れる結果ではない。英語教育に相当の力を入れているにもかかわらず、受験生全体の平均でみると、教育条件の格段に悪い発展途上国も含めて、英語を母語としない人々の世界全体の平均にも到達していないということになるからである。

言語学的距離

この原因について、英語と日本語の「言語学的な距離」ではないかという考察がある。学習者の母語と目標言語とが、言語的にみてどの程度似通っているかということである。たとえば、ドイツ語、フランス語、英語などヨーロッパの言語は、おなじインド・ヨーロッパ語族に属しており、多少の違いはあっても、ほぼ同じようなアルファベットを使い、語彙にも類似のものが多い。つまり、両者の間の言語学的な距離が近い。それにたいして、日本語と英語では共通のものはほとんどない。文字も違えば、語彙も語順も違う。発音もそれぞれに特有の発音が多い。したがって、ドイツ人が英語を学習する時には、ちょっとの切り替えですむとしても、日本人が英語を学習するときには、全く新しい言語を学習することになり、最初から総てを学ばなければならない。だから日本人が英語を勉強するのは難しいのだという。

そのあたりのことを、1,338,682人が受験した1991年6月から1993年6月のTOEFLの結果で考察してみよう(ETS発行のTOEFL Test and Score Manual Supplementによる)

	Number	Sect.1	Sect.2	Sect.3	Total
Belgium	1,694	60	60	59	596
France	30,148	54	56	56	551
Germany	20,576	60	59	57	587
Italy	9,230	54	57	57	561
Netherland	2,424	63	61	59	609
Spain	12,531	54	55	55	547

これで見ると、確かに各セクションで日本のデータより10ポイント前後の違いがある。合計点では100ポイント以上違っている場合もある。したがって、「言語的距離」が原因の1つであるということは、ある一面をついていることは否定はできないであろう。

アジアでの位置

しかし、それだけで説明ができるであろうか。日本人が英語ができないのは、言語的に距離のある日本語を話す日本人の宿命だと諦めるべきなのであろうか。私はそのような立場はとるわけにはいかないと思っている。というのは、言語的距離が遠いから英語ができないというのであれば、日本語と同じように英語と共通の部分がほとんどない中国語や朝鮮語を話す人も同じように不利なはずだからである。その点も調べてみよう（同じETSの資料による）

	Number	Sect.1	Sect.2	Sect.3	Total
Japan	260,513	49	50	48	490
Korea (ROK)	110,232	48	51	52	504
China (PRC)	151,561	51	56	54	540
India	67,265	55	58	58	569
(Hindi	14,321	58	59	59	587)

先程のヨーロッパの国々と比べると、全体的にかなり得点が低なっているのは分かる（ただし、インドだけは別である）。したがって、言語的距離ということも確かに1つの原因として存在するといえるであろう。しかし、ここで次の疑問がでてくる。では何故日本が中国語を話す中国人、朝鮮語の韓国人よりも合計点が10ポイント以上も違うのだろうか。韓国の504、中国の540という数値は、先程のETSの説明では、短期大学以上で学部の授業に十分についていける英語力である。しかし、日本の場合はその短期大学のレベルにも達していないのである。

アジアの全体を見まわしてみると、この統計には24か国が挙げられているが、そのうちで、合計点が日本よりも低いのは北朝鮮の476（リーディングは47）とバングラディッシュの483（同じく49）だけである。しかし、この2つの国の場合は教育事情の特殊性を考えねばなるまい。

ここで、インドを付け加えたのは、インドでは英語が現在のところ公用語の1つであり、教育用語として使われている場合があって、日本や韓国、中国とは条件が違っている。つまり、英語を媒体にして社会や数学などの授業が行われている。英語がcontent subjectの指導に使われた場合に、どれぐらいの差ができるかを見るためにあげてみたが、前のヨーロッパの諸国に近い得点がとれていることが分かる。

平均の問題点

ただ、このような考察をするとき、受験者全体の平均で云々できない面があることは事実である。日本で発行されている英字新聞*The Daily Yomiuri*が“Japan Tops TOEFL Entrants; Ranks Only 149th In Scores”（TOEFLの受験者数は最高、得点は149位）という記事を載せたことがある（February 17, 1993）。これにたいして、James D. Brown氏が6つの論点を挙げてこれに反論している（Brown 1993）。

かいつまんでその論拠を述べると、

- a) 受験者の数が国によって大きく違っていること——少数のものが受ける場合と、大勢が受験する場合では平均点の意味が違う。
- b) TOEFLを受験する理由の違い——留学を目標に受験する人と、ただ自分の英語力を試したり成長の度合いを測るために受験する人とは、そのレベルも意気込みも違う。
- c) 受験者の英語とのかかわりかたが違う——シンガポールやインドでは英語が学校で使われる言語になっている場合があるが、日本などでは英語の時間にしか勉強しない完全な外国語である（この論があるために私は韓国と中国を比較の対象にしてみたのである）
- d) その国の経済状態でTOEFL受験の態度が違う——受験料は国によってその重みが違いそのため受験に対する真剣さの度合いが違う。（一般的にはそうかもしれないが、TOEFLを受験する層でそのようなことが言えるであろうか）
- e) 平均値というのは受験者全体の平均なので、それで全体の力を断定することはできない。シンガポールやインドは平均値が高いかもしれないが、得点の高い圏内では日本人の数が多いたことが十分考えられる。
- f) このような試験には一時的な変動というものがある。もちろん統計的には（ $p < .01$ ）で有意という結果が出ているが、この数字を利用するためにはさまざまな問題点を考慮しなければならない。前記の*Yomiuri*の記事にはこのような点に対する配慮が全然行われていない。

とこのような意見である。

それでも数字は語る

平均点で論じてはいけないというBrown氏の反論はあるにしても、—それに新聞記事はかなりセンセーショナルな書き方をしてあって、それへの反論でもあったが、日本人学生

の英語の力がなかなか世界に通用しないのは事実である。教育学部では、毎年1名に海外の大学に留学の機会が与えられているが、最近では希望者が少なくなっている。その原因の1つは、アメリカの大学に留学しても、アメリカ人の学生と一緒に学部の勉強をするのではなく、ESLのクラスで、英語圏以外の国からの学生と一緒に英語を勉強せざるを得ないことが多い。中学校・高等学校と勉強をして、さらに、大学で2年の勉強をしたら、少なくとも英語国の大学の学部レベルに入るだけの力はずつけられないものかと、英語の担当者としては思わざるをえないのである。

したがって、このデータを根拠にして、日本の英語教育で学生達が身につけた英語力の国際的な位置を判断しても、かならずしも間違っていないと私は受け止めたい。それが、我々が行ってきた英語教育の現実であり、我が国の英語教育の弱点をついていると思うのである。私たちはこれまで英語教育には相当に力を入れてきた。学生達もあれほどの時間と労力をそそいで英語を勉強してきている。それなのに、世界に通用する英語力といえるものがないのである。確かに、日本語と英語の言語的距離が遠いということもあるだろう。あるいは、謙譲の美德をもつ日本人が言葉を学習するときの宿命だとの意見もある。しかし、それを口実にするわけにはいかない。これまでの日本の英語教育そのものに原因があると考えべきなのだ。そのことを、我々英語を教える教師達がしんしん受け止め、我々の行っている英語教育を反省してみる必要があるだろう。

References

- Brown, J.D. 1993, "Language Test Hysteria in Japan?" *Language Teachers* XVII:12
JALT
- ETS 1987 *Reading For TOEFL Workbook*. TOEFL Program Office, Princeton, USA
1992 *TOEFL Test and Score Manual*. 1992-93 Edition. Educational Testing
Service, Princeton, USA.
1994 *TOEFL Test and Score Manual Supplement*.
- Henning, G. 1991 *A Study of the Effects of Contextualization and Familialization on
Responses to the TOEFL Vocabulary Test Items*. Research Reports 35 ETS
- Henning, G., Cascallar E. 1992 *A Preliminary Study of the Nature of Communicative
Competence*. Research Reports 36 ETS
- Oltman, P.K., L.J.Stricker, and T.Barrows 1988, *Native Language, English
Proficiency, and the Structure of the Test of English as a Foreign Language*.
Research Reports 27 ETS.
- Swinton, S.S., D.E.Powers 1980 *Factor Analysis of the Test of English as a Foreign
Language for Several Language Groups*. Research Reports 6 ETS.
- 鈴木孝夫 1987 『ことばの社会学』 新潮社
トラッドギル, P., J.ハンナ著/寺沢芳雄 梅田巖訳 『国際英語—英語の社会言語学的
諸相』 研究社出版
本名信行 1990 『アジアの英語』 くろしお出版
萬戸克憲 1988 『外国人講師との授業—国際化時代の教育への布石』 大修館書店